

特選  
2020  
金融担当  
大臣賞

## 第18回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

# 祖母から学んだ経済戦略

大分県・大分東明高等学校 2年 安部 萌由子

「別府のスイーツといえば何ですか？」

大分を訪れた観光客からこう聞かれた時、あなたなら何と答えますか？ 私なら、

「プリンです。」

と答えます。「別府プリン」、「地獄蒸しプリン」という名前は誰もが一度は聞いたことがあると思います。トロツとした口どけに、苦味のきいたキャラメルがマッチしておいしいと評判の別府のご当地スイーツです。そんな「地獄蒸しプリン」の生みの親は、私の父方の祖母です。祖母は、私が生まれた時にプリン屋を営んでいたため、私は母方の祖母と区別して、「プリン屋ばあば」という愛称で呼んでいました。しかし、そんな「プリン屋ばあば」が「地獄蒸しプリン」の生みの親だと知ったのはここ最近のことで、とても驚いたと共に、祖母の「仕事観」に感銘を受けました。ここではその時祖母から聞いたことについて述べたいと思います。

今から26年前の1994年、当時55歳の祖母は、別府市の明礬温泉<sup>みょうばん</sup>というところで働いていました。もう子ども（私の父）は自立し、夫も早くに亡くしていたので、自分の生活費を稼ぐための週3日の出勤でした。今や湯の花製造技術が国の重要無形民俗文化財に指定され、種類豊富な地獄蒸し料理やお土産で観光客から人気の明礬温泉ですが、当時のお土産といえばおまんじゅうくらいしかなく、決して今のように温泉グルメが栄えてはいませんでした。そんな状況下で祖母は「何か面白いことができないかなあ。」と常に考えていたそうです。そんなある日、祖母は自宅で茶碗蒸しを作っていました。卵を容器に入れて、蒸し器に入れて……といつもと同じ作業を進めていくうちに、「同じ方法でプリンが作れるかも……。」そう思ったのが「地獄蒸しプリン」の原点でした。祖母は大きな好奇心と素早い行動力で、すぐにプリンの試作に取り掛かりました。

地獄（高温の温泉）から噴出する蒸発熱を利用してプリンを作るということは、誰もが初めての試みであったため、試行錯誤を繰り返したそうです。そこで祖母は、「地獄蒸しプリン」が当たった理由となったイレギュラーな試みをします。それこそが、「地獄蒸しプリン」の特徴である、“苦い”キャラメルです。

当時、プリンのキャラメルは“甘く”ておいしいというような風潮があり、多くの女性から支持されていました。また、全国的にブラックコーヒーが人気を博していました。祖母はそれをヒントに、敢えてキャラメルを“苦く”することで、それまでの“甘い”プリンの概念を覆し、大人な味わいの、男女から共に支持されるプリンを作り上げました。試作品をお客さんに食べてもらったところ、とても好評で、たちまち各種メディアに知れ渡ったそうです。それから別府のプリンブームを引き起こした祖母は、明礬温泉を退職し、旧友と共に、プリン工房「遊・You」として独立します。この店名は祖母が考えたもので、「期待しすぎず、気張らずに、あなたと遊びたい」というような思いが込められています。祖母は借金をしない程度に、趣味として、楽しくやっていたらいいなと思っていたそうです。祖母は去年の2019年、24年もの間続いたプリン屋を畳みました。理由は、80歳になり体力的にきつくなったということと、売り上げが落ち着いてきたということでした。祖母はこの「地獄蒸しプリン」開発とプリン屋での経験を「最後の青春」だったといいます。

私はこの祖母の話から、重要な三つの経済戦略を学びました。一つ目は、常に周りに目を向けるということです。祖母は単に任された仕事をこなしていただけではなく、常に周りに目を向け、自分が「したい」と思うことを探していました。ヒット商品は、一概に大勢で長い時間をかけて生まれるものではなく、個人の小さな気づきや身近なものから得るアイデアから生まれるものだと思います。二つ目は、自分の「したい」を実行に移すということです。祖母が明礬温泉に勤めていた時代（1990年頃）はまだ手づくりのものが販売されるようなことは少なかったそうです。例えば、今でいう自営業のパン屋やハンドメイドのアクセサリショップなどです。つまり、自分の「したい」を実行に移す人があまりいなかったのです。そんな時代にプリン作りを始めた祖母は、「地獄蒸しプリン」だけでなく、“自営業の先駆者”ともいえるのではないかと思います。現代は数十年前とは違い、自営業に加えてネット販売も栄えています。私たち

は圧倒的に自分の「したい」を実行しやすいはずなのです。三つ目は、気張らないということです。実現するかしないか分からないことに挑戦するのは、誰もが期待と不安を併せ持つものだと思います。しかし、祖母は結果に期待せずに、お店の名前の通り、「あそびごころ」でプリン作りを楽しんだのです。その背景には、祖母が経済的に困っていなかったこともあると思いますが、実際に、約10年でプリン屋の利益がプリン作りの設備費を上回り、結果に結びついたそうです。気張らずに仕事を楽しむ心がプリンを通してお客さんにも伝わったのかもしれない。

私は祖母の話を聞いて、仕事への姿勢と心持ちを学びました。私も祖母のように、「最後の青春」を思いっきり楽しめるように、学校では多くの教養を身につけ、社会では多くの経験を積んでいきたいと思っています。

